

未来への扉

- c. 城壁のそばで、フルーツの竜眼を採って美味しそうにはお張る住民たち
- d. 2012年フエ・フェスティバルの看板
- e. 王朝があったフエの洗練された店構えのレストラン
- f. 庶民の足であるバイクや自転車が行き交うフエの街路。ビル群のある都市部の喧噪とは異なる趣がある



急成長するアジアの一翼を担うベトナム。ホーチミンやハノイなどの大都会には、バイクが道路にひしめき、若い力があふれている。その一方、異なる魅力があるのが中部のフエ。ベトナムで最初の世界遺産となった古都であり、フォン川のほとりに歴史的な建造物が立ち並ぶ。どこかゆったりとした時が流れる風情がある。古くから王国などの中心的な都であり、仏領インドシナ時代には皇族が宮廷を構え、19世紀初頭から20世紀半ばまで続いたベトナム最後の王朝、グエン(阮)王朝で首都として、また文化や宗教の中心として栄えた。

城壁と濠で囲まれた王宮に入る。正門を上って敷地を一望すると中国風の建物や屋根の上の竜の装飾が目を引く。広い敷地を歩くと思いのほか草地が多く建物は少ない。ベトナム戦争でフエは激戦地となり、王宮の建物も破壊されたからだ。現存する建物のほとんどが修復再建されたものだが、中にはそのまま残った石壁もある。風雨にさらされて色落ちした朱色の壁を覆う黒ずみと穴。銃弾と戦禍だろう。負の遺産の面影が交差する中で、すそを翻して観光客を先導する女性ガイドたちのアオザイの色が目まぶしい。戦禍の跡地に咲いた花のような彩りだ。



グエン(阮)王朝の菩提寺の顯臨閣

a. 19世紀初頭ザーロン帝の時代に建てられた、王宮前にそびえ立つフラッグ・タワー
b. ベトナム戦争で王宮の建物は大半が破壊された。現在の建物は部分的に復元されている





首都：ハノイ
 面積：32万2,400km²(日本よりやや小さい)
 人口：約8,700万人(2010年)
 公用語：ベトナム語
 宗教：仏教、キリスト教、カオダイ教など
 1人当たり国民総所得(GNI)：1,100ドル(2010年)
 経路：日本からハノイなど各都市への直行便があり、所要時間は約6時間。
 通貨：ドン(VND) 1VND=約0.0037円(2011年12月現在)
 気候：首都ハノイがある北部は亜熱帯に属し、四季がある。ホーチミンがある南部は熱帯モンスーン地帯に属し、年間を通じて高温多湿。



川沿いにあるフン・フォン村。洪水などの自然災害の常襲地域



災害弱者支援の一環として行われているキノコ栽培



フエ近郊、フン・フォン村で線香作りをする女性たち

ベトナム料理 厚揚げのトマト煮込み 「ダウフー・ソット・カーチュア」



ベトナム人は食に対する思い入れが強い。食材の色味や食感をとても大事にし、使う食材の豊富さに加え、調理方法も、焼く、揚げる、煮る、蒸すなど、多種多様だ。さらに、魚醤調味料のヌクナムに砂糖とレモン汁を加えたものを料理につけるなど、味付けにもこだわる。

とはいえ、国土が南北に長く地方によって気候が異なるため、食文化も地域色豊か。北部は塩気が強いシンプルな味付け

が好まれる一方、中部にはトウガラシを使った辛い味付けが多く、南部に行くと甘酸っぱい料理が増える。

「ダウフー・ソット・カーチュア」は、ベトナムならどの食堂でも食べられる定番メニュー。日本より少し固めの厚揚げ豆腐を、旧宗主国フランスの食文化の影響からトマトで煮込む。味付けにはもちろんヌクナム。厚揚げの中身をくり抜いてお肉を詰めてもおいしい。ごはんに乗せて豪快にどうぞ。

東京・江古田のベトナム屋台食堂「Mai mai」は、ベトナム料理に魅せられ料理研究家にまでなってしまった足立由美子さんが、ベトナムの地元の人々に親しまれている料理を日本に紹介したいと開いたお店。日本で人気のフォーもおいしいが、ここではちょっと「通」なベトナムの味が楽しめる。



ベトナム屋台食堂Maimai
 〒176-0005 東京都練馬区旭丘1-76-2
 TEL: 03-5982-5287
 営業時間：水～土曜18時～22時半、
 日曜18時～22時(L.O.は30分前) 月火定休
 URL: www.ecoda.jp

- 【材料(2人前)】**
 厚揚げ(小)4個/青細ネギ(5センチ) 適量/トマト250グラム(小2個)/ニンニク2分の1片(みじん切り)/サラダ油大さじ2分の1/A:ヌクナム小さじ1.5、シーズニングソース(大豆が主原料の調味料)小さじ1、砂糖小さじ2分の1、コショウ少々
- 【作り方】**
- 鍋にサラダ油をひいてニンニクを炒め、香りが出たらざく切りにしたトマトを加えて炒める。
 - 1を3～4分煮込み、Aを加えて味をつける。
 - 2に油抜きした厚揚げを加え、さらに5分ほど煮込む。
 - 青細ネギを加え、さっと混ぜたら火を止めて出来上がり。



手足を器用を使って香木を削る線香作り。練り合わせて棒に塗り付けたり、コーン型にしたりして仕上げる



乾燥のために並べられている線香

王宮を離れ街を抜けると、稲作地帯が広がる。黄緑色の穂が揺れる田園、傘のような三角帽子をかぶって農作業をする人、放し飼いにされたアヒルやヒヨコの大群、野に鎮座する大きなお墓、水牛を連れゆく人……。のどかな農村の風景だが、常に洪水などの自然災害に見舞われる地域でもある。

その一つ、フン・フォン村は川沿いの平坦な土地にあつた。毎年のように起こる災害は完全には防ぎようがない。そこで、波を和らげるための植林、河川氾濫防止の堤防建設などと並行して、被災地の人々が生計の多様化を図れるよう、JICAや地元の大学による支援が行われて

いた。村人たちはキノコやバナラを栽培したり、女性は手足を器用に使用して線香を作ったりしている。洪水の被害を受けにくい家畜の飼育方法も指導されているという。自然の力と向き合いながら活路を見いだす生き方に逞しさを感じた。

フエの街角に、2012年フエ・フェスティバルの看板があつた。2011年に国花となったピンクのハスの華に囲まれた女性の姿が描かれている。まるで幸せを運んでくるミューズ(女神)のよう。2012年はベトナム観光年で、フエはその中核となるという。古きに新しきを重ねていく活力が、未来の扉を開いていくのだと思つた。

国際協力レポーター

私が見た国際協力の現場

昨年8月22〜28日、ベトナムで行われている日本の政府開発援助（ODA）を10人の「国際協力レポーター」が視察。現地の人々が直面するさまざまな問題、それに対する日本の長年の国際協力は、彼らの目にどう映ったのだろうか。

「貧しい国を支援してあげる」ことが国際協力だと思っていました。

でも、日本とベトナムは相互に学び合っている。協力し合っているのですね。「国際協力レポーター」として、ベトナムを訪れた相川美由美さん（神奈川県）の言葉だ。これは、政府開発援助（ODA）への理解を深めてもらうのと、一般公募で選ばれた人をJICAが開発途上国に派遣する制度。2011年は、JICA地球ひろばでの事前研修を経て、ベトナムとケニアの協力の現場に計19人が向かった。

ベトナムチームは、北はハノイから南はホーチミンまで、約1800キロにわたり国土を縦断。JICAの技術協力、円借款、無償資金協力、JICAボランティアなどの活動を視察した。最初に訪れたのは、首都ハノイにある国立衛生疫学研究所（NIHE）。ベトナムでは、2003年に重症急性呼吸器症候群（SARS）、04年以降に鳥インフルエンザなどの新興感染症が流行し、多数の死者が出ている。JICAは06年から感染症の主要研究機関であるNIHEの支援を通じて、感染症の流行防止に取り組んでいる。無償資金協力で整備された実験室を見た大西美穂さん（沖縄県）は「ただモノを渡すだけでなく、施設の維持管理など、将来を見据えて人材育成を強化していることが素晴らしい」と話した。

靖さんが活動する部品工場を視察したレポーター。工藤さんは裾野産業の技術向上のみならず、日本の製造業を支えてきた5S（整理・整頓・清潔・掃除・しつけ）も推進している。「日本が誇るカイゼン活動が、海外で実践されている現場を目の当たりにしてうれしい」と富永亜紀さん（神奈川県）は喜んでいた。

そして、世界遺産に指定されている中部の都市フエに移動し、JICAが09年から実施している「中部地域災害に強い社会づくりプロジェクト」を視察した。気候・地理的な条件から、豪雨や洪水が頻発しているこの地域に対して、JICAは地域住民を巻き込んで、ハザードマップの作成や防災教育の普及を進めている。「防災活動を地域に根付かせるには、若者の力が必要不可欠。彼らが都市に流出しないよう、住民の生計向上を支援していたのが印象的だった」と久保美幸さん（岩手県）。東日本大震災を経験した日本が、逆にベトナムから学ぶこともあると感じたという。

一行はさらに南下し、最終目的地のホーチミンに到着。日本の円借款で整備された幹線道路「東西ハイウェイ」や市内の下水処理施設、ホーチミン工科大学などに足を運び、開発コンサルタントや建設会社、大学など、日本のさまざまな国際協力のアクターから話を聞いた。



[上]シニア海外ボランティアの工藤さんの活動先でプリンター部品の組み立て作業について説明を受ける

[右]ピンポン下水処理施設で説明を聞きながら、真剣にメモをとるレポーターたち

[左]ベトナム日本人材協力センターの日本語クラブの学生と意見交換

撮影：永武ひかる（写真家）



[右]青年海外協力隊が活動するチョーライ病院を視察。看護師から話を聞いた
[左]ホーチミン工科大学で稲わらから作成したバイオエタノールを手にし、研究の成果を実感



1週間の視察を経て、「ベトナムのように若い力にあふれた国と関係を築いていくことは、今の日本を生き抜くことにもつながっていくはず」と川内由紀さん（兵庫県）。「東日本大震災でたくさんの方から支援を受けて、私は人と人の絆の大切さを実感しました。ベトナムで日本の国際協力の軌跡にふれ、私たちは世界で果たすべき役割を全うしていく責任があると再認識した」と言う。

